**Abstract**

**C-3　　選手の3次元位置を追跡するバレーボール分析支援システム**

19番　佐野　裕馬 （制御工学研究室／外山）

本研究室ではバレーボール競技に対する定量的な分析を支援するシステムに関して研究を行ってきた。先行研究では1台のカメラを用いて選手の2次元位置を追跡したが，選手の跳躍時に誤った位置を推定する課題があった。そこで，本研究では複数のカメラを用いて3次元座標を追跡し，その課題を解決することを目的とする。研究結果として、カメラ位置・姿勢の推定誤差と選手の交差によって実用できるシステムには至らなかった。

**1　はじめに**

現在，スポーツトレーニングの分野では定量的に選手の動きを分析し，改善につなげる科学的な指導が求められている。例えばバレーボール競技では，データバレーという分析ソフトが活用されている。しかし，データバレーではアナリストの主観に基づいたデータを手入力する必要があるため，ソフト操作性とそれに起因する入力ミス，データ精度等が問題である。  
 このような背景から先行研究では，1台のカメラを用いて選手の2次元位置を追跡するシステムを開発した[1]。しかし選手が接地していることを前提としており，跳躍時に誤った位置を推定する課題があった。バレーボール競技では選手が跳躍を頻繁に行うため，この課題の解決は必須である。

そこで本研究は，複数台のカメラを用いて選手の3次元位置を追跡することで先述の課題を解決する分析支援システムの開発を目的とする。

**2　選手の位置推定法①**

**2.1　コートの撮影**

コートの様子を同時に複数台のカメラで撮影する。撮影条件として、カメラ位置・姿勢は固定する必要がある。本研究では2台のカメラを用いて撮影を行った。

**2.2　カメラキャリブレーション**

複数の映像から選手の3次元位置を推定するにあたり、カメラの焦点距離・光学的中心を示すカメラ内部パラメータ、撮影カメラの位置・姿勢を示すカメラ外部パラメータを知る必要がある。

まずコートの撮影とは別に、既知の平面パターンを複数の画角から撮影し、カメラ内部パラメータを推定する。この際、レンズによる画像歪みを示す歪みパラメータも得ることができるため、撮影映像に対してレンズ歪みを補正するように変換を行う。

次に図1に示すコートの既知点と映像での位置を対応付け[2]、再投影誤差を最小とするカメラ外部パラメータを推定する。この手法では、映像にコートの既知点が全て映っていない場合においても、カメラ外部パラメータを推定することができる。先行研究ではコート全体が映像に映る必要があったため、撮影条件は向上した。

グラフ, 折れ線グラフ

自動的に生成された説明

図1　バレーボールコートの既知点14点

**2.3　AlphaPoseによる姿勢推定**

本研究では、追跡する選手の3次元位置をその選手の腰の位置に設定する。選手の腰の位置を推定するために、映像を各フレームの画像に分割し、多人数の姿勢推定とID振り分けによる人物追跡が可能であるAlphaPose[3]を用いる。画像に映る選手を検知し、姿勢を推定することで腰の画像座標を推定する。図2にAlphaPoseによる姿勢推定例を示す。

ダイアグラム

中程度の精度で自動的に生成された説明

図2　AlphaPoseによる姿勢推定の様子

**2.4　映像間の選手の対応付け(手動)**

AlphaPoseは各映像に対して用いるため、同じ選手に対して映像ごとに異なるIDが振り分けられる。映像間で選手の対応付けが必要であるため、各映像の初めのフレーム画像において、目視で同じ選手を確認する。AlphaPoseによって検知されている全選手に対して確認を行い、それぞれIDを対応付ける。

**2.5　選手の3次元位置推定**

映像ごとに、2.2節で得られる焦点距離と2.3節で得た選手の腰座標より、カメラレンズから選手の腰に向かう3次元のベクトルを定義できる。また、2.2節で得られるカメラ位置も合わせることで、検知できた選手の腰を通る直線を定義できる。

特定の選手を通る直線を各映像で選択し、それらの最近点を選手位置として求める。

**2.6　手動で対応付けした選手位置の推定結果**

手動で選手の対応付けを行い、撮影映像の初めのフレームにおける選手の3次元位置をコート平面位置に落とした画像を図3として示す。続いて10秒経過後における選手のコート平面位置を図4として示す。

カレンダー

低い精度で自動的に生成された説明

図3　0フレーム目での選手の平面推定位置（手動）

グラフ が含まれている画像

自動的に生成された説明

図4　10秒経過後の選手の平面推定位置（手動）

図3と図4を比較すると、位置を推定できている選手が少なくなったことが分かる。これは、時間が進むにつれて選手の交差が起こり、選手の検知が不可能になることで、新しいIDをAlphaPoseが割り振ってしまい、それ以降の選手の対応が取れなくなったことが原因と考えられる。

**3　選手の位置推定法②**

2章で述べた推定法では、選手の交差によって選手位置を推定できなかったが、原因が2.4節における手動での対応付けだと考えた。そこで3章では、自動で選手を対応付ける方法を述べ、その動作を検証する。

**3.1　映像間の選手の対応付け(自動)**

まず、2.5節のように映像ごとに各選手の腰を通る直線を定義する。映像間で2直線の組み合わせを全て考え、直線間距離を計算する。同じ選手を通る直線間の距離は近いと考え、全ての組み合わせの中で距離の近いものから順に選手IDを対応付ける。

2.4節では初めのフレームで選手を対応付けたが、本手法では映像の全フレームにおいて先に述べた処理によって選手を対応付ける。これによって選手の交差によって生じる選手IDの変化に対処する。

**3.2　自動で対応付けした選手位置の推定結果**

自動で選手の対応付けを行い、撮影映像の初めのフレームにおける選手の3次元位置をコート平面位置に落とした画像を図5として示す。

グラフ が含まれている画像

自動的に生成された説明

図5　0フレーム目での選手の平面推定位置（自動）

手動で選手の対応を取った図3と比較すると、選手位置が異なっており、図5に示した推定が誤っていると分かる。誤った推定の原因として、2.2節で行ったカメラキャリブレーションでの誤差が考えられる。

カメラ位置の推定誤差は1台目のカメラで約29cm、2台目のカメラで約13cmだった。また、カメラ位置の誤差に付随してカメラ姿勢にも誤差が生じていると考えられる。誤差のあるカメラパラメータを使用して選手の位置推定を行ったため、異なった選手を対応付けてしまったと考える。

**4　まとめ**

本研究では，複数台のカメラを用いて選手の3次元位置を追跡するシステムの開発に取り組んだ。結果として、カメラキャリブレーション時に生じる誤差と選手の交差によって実用できるシステムを開発することはできなかった。

カメラキャリブレーション時の誤差を取り除くことができれば、3.1節で示した自動での選手対応付けが機能すると考えられるため、カメラキャリブレーションの精度向上を今後の課題とする。

**参考文献**

[1] 平田，“情報端末の内蔵カメラを用いた運動 再現システム”，R3長岡高専電子制御工学科 卒業論文（2022）

[2] 中井, 村本, 栗田, 高根, 瀧澤, 塚本, 河合，“バレーボールコート内の既知点を用いた3次元座標空間の再構築方法 の精度とその特徴”，バレーボール研究 19巻1号(2017)

[3] Fang，Hao-Shu and Li，Jiefeng and Tang，Hongyang and Xu，Chao and Zhu，Haoyi and Xiu，Yuliang and Li，Yong-Lu and Lu，Cewu，“AlphaPose: Whole-Body Regional Multi-Person Pose Estimation and Tracking in Real-Time”，IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence（2022）